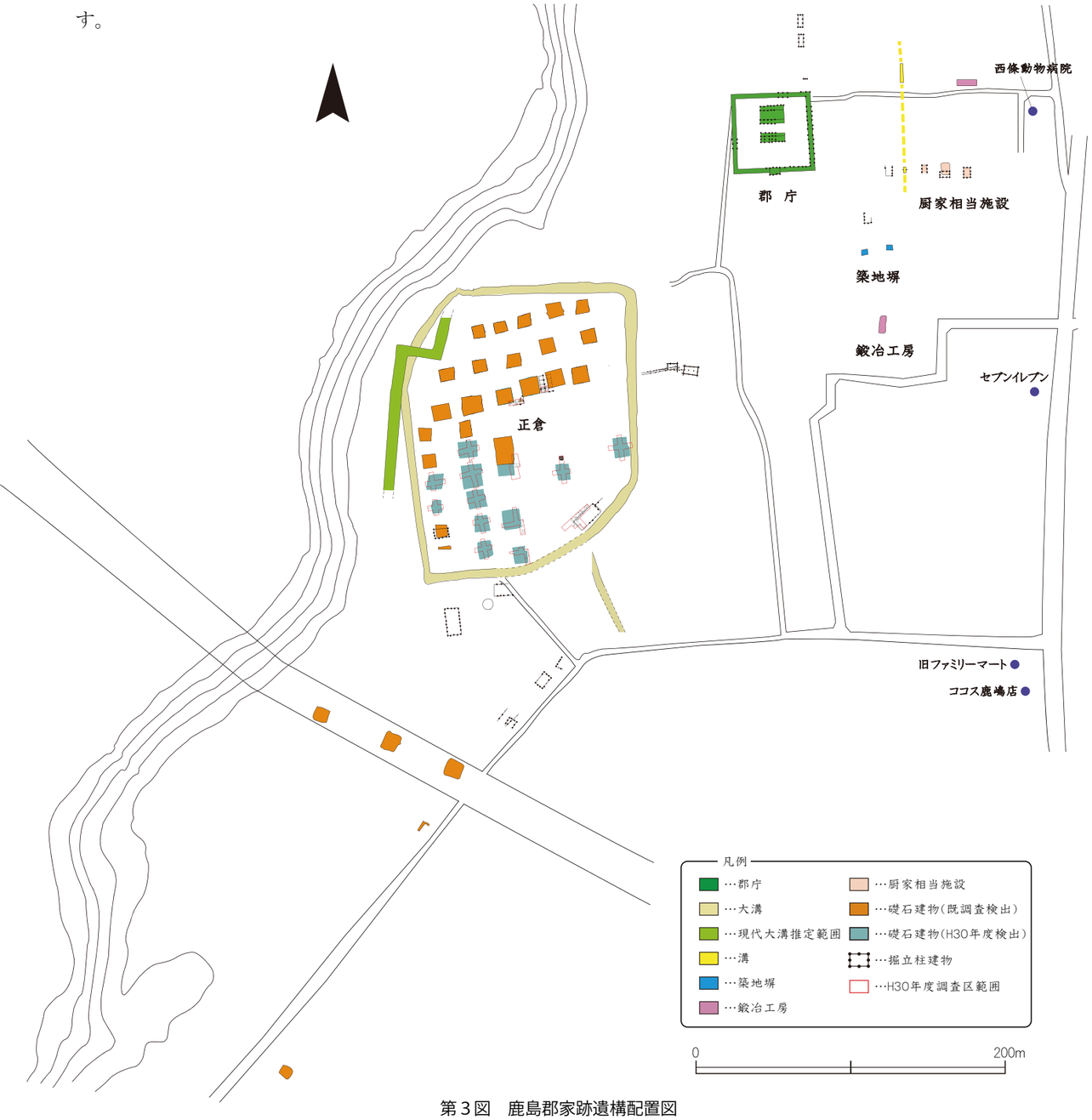
（4）鹿島郡家跡全体図

これまでの調査成果により，郡庁・正倉院，厨家施設等の概要が明らかになってきました。正倉院内には整然と倉庫群が並んでいますが，正倉院の南側においても礎石建物が見つかっており，倉庫群の広がりが想定されます。



第３図　鹿島郡家跡遺構配置図

※遺構の解釈などについては，平成３１年２月１０日現在のものであり，今後調査や検討によって変更する可能性があります。また資料の引用・掲載はご遠慮願います。

『平成 30 年度国指定史跡「鹿島神宮境内附郡家跡」現地説明会資料』
編集：鹿嶋市教育委員会事務局社会教育課・公益財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団どきどきセンター
発行：平成３１年２月 10 日

平成30年度　現地説明会資料

国指定史跡「鹿島神宮境内附郡家跡」
正倉院（倉庫群）確認調査

開催日時；平成３１年２月１０日(日)
13時00分～14時00分

1　遺　跡　名　国指定史跡「鹿島神宮境内附郡家跡」
2　調 査 目 的　保存目的のための範囲確認調査
3　所　在　地　鹿嶋市大字宮中 139 番地 1 ほか
4　調 査 面 積　約 1，2 00㎡
5　調 査 期 間　平成 30 年 10 月 17 日～平成 31 年 2 月 28 日
6　調査主体者　鹿嶋市教育委員会
7　調 査 機 関　（公財）鹿嶋市文化スポーツ振興事業団

第１図　国指定史跡「鹿島神宮境内附郡家跡」及び旧郡家跡推定位置図（国土地理院 1/50,000 地形図を加筆修正）

（1）遺跡の立地

郡家跡は鹿島神宮から南へ約 1.5㎞の標高約 32 ～ 34 ｍの鹿島台地の神野向支丘に位置します。昭和 61 年８月に国指定史跡となり，現在は約 73,600㎡が指定を受け，国指定の郡家跡としては最大規模を誇ります。

国指定史跡「鹿島神宮境内附郡家跡」は，鹿島神宮・沼尾神社・坂戸神社の境内及び古代の鹿島郡の行政機関としての郡家跡が国史跡に指定されたため，これらを含めた総称です。

（2）調査の成果

鹿島郡家跡は，昭和 55 年２月の個人住宅に伴う発掘調査を皮切りに郡家の範囲確認調査を実施し，昭和 56 年度から奈良国立文化財研究所（現 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）平城宮跡発掘調査部の指導を受け，郡家解明のため本格的に学術調査を開始し，昭和 63 年まで続きました。また，平成 27 年度から５ヶ年計画で，史跡整備のための内容確認調査を行っています。

これまでに平成 27 年度は郡庁の正確な規模の把握，平成 28 年度は正倉を取り囲む大溝の範囲確認，平成 29 年度は正倉院内の北側の倉庫群の範囲確認を行ってきました。

正倉は，南北約 180 ｍ，東西約 150 ｍの範囲で大溝に区画された地域に３時期の建物変遷が想定されています。大溝の規模は，幅４～５ｍ，深さ約 1.5 ～ 2.5 ｍです。これまでの調査成果で建物は，総柱の掘立柱建物１棟，掘立柱建物８棟，礎石建物 33 棟が見つかっています。重複関係から雑舎建物を除くと大きく３時期の変遷が考えられ，総柱掘立柱建物→礎石建物（掘込地業）→掘立柱建物（礎石建物位置を踏襲する建物）と移行します。調査で大溝に付随する柵又は土塁は確認できませんでした。

平成 30 年度の調査により，　正倉院の全体像が明らかになってきました。まず中心部に東西約 11 ｍ，南北約 25 ｍの大型の礎石建物が配置され，そこを中心に西に２列，北に３列の大きさ約７ｍ四方から 14 ｍ四方の大小様々な礎石建物が並びます。これらの礎石建物は近接している個所で幅２ｍぐらいの個所や地業の深さの違いなどから，礎石建物は大きく３時期の変遷のうちの２期目の時期が考えられていますが，その中でも建てられた時期が異なることが考えられます。また正倉院の南東部は空間地の様相がありましたが，今年度の調査において新たに２棟づつの礎石建物があることが確認できました。どのような役割があったのか，また正倉院内の建物の時期変遷などが今後の研究課題となります。

その他に，大型の礎石建物跡の東側で確認された礎石建物の北側で竪穴建物跡を確認しています。その床面の近くで小金銅仏が出土しました。台座に枘を差し込む菩薩立像で，時期は一緒に出土した土器から 10 世紀末から 11 世紀のものと考えられます。顔や胸の一部に鍍金が残り，当時の荘厳な様子がうかがえます。恐らく郡家が機能しなくなった後の時代に使用され，竪穴建物跡の廃絶とともに廃棄されたものと考えられます。同時期のものと想定される小金銅仏が郡家から北東へ約 1.5 ｋｍのところにある鉢形神宮寺経塚からも出土しており，関連性がうかがわれます。

（3）平成３０年度遺構配置図

凡例
…H30 調査トレンチ
…既調査地点
…大溝推定ライン
…既調査検出礎石建物
…H30 検出礎石建物
…掘立柱建物
…史跡指定範囲

0　50m

第２図　平成 30 年度発掘調査区及び正倉域遺構配置図

正倉院の建物の様相

今回の調査で新たに 11 棟の礎石建物が確認され，正倉院内には全部で 33 棟の建物が並んでいたことが分かりました。礎石建物は，土台となる基礎部分を地業と呼ばれる工法（５ｃｍぐらいの厚みで棒状の叩き具で突き固めて何層も作る基礎）で作り，その上に石を設置し柱を建てる建物です。下図は，瓦葺きのものと板葺きの屋根の復元想定図になります。正倉院跡では少量ですが瓦片が出土しています。瓦の出土量と建物の棟数を比較すると全部の建物が瓦屋根で葺かれていたのではなく，板葺きの屋根が多数であったことが考えられます。

また礎石建物の基礎部分の地業については，深さが 80 ｃｍぐらいのものから 130 ｃｍぐらいのものまであり，比較的深く作られている地業は精緻に行われている様子がうかがえます。これらをもとにどの時期にどのくらいの倉庫が建てられていたか復元していきます。

※左の第２図は，検出状況を示しており，すべての建物がこのように建てられていたものではありません。

④トレンチ　西から
手前が掘立柱の穴，奥が礎石建物跡（昭和 56 年に確認）

⑥・⑦トレンチの大型礎石建物確認状況
（平成 29 年度調査時のもの。北側から）

瓦を葺いた倉庫　復元想定図

板を葺いた倉庫　復元想定図

小金銅仏

郡家の時代とは異なりますが，竪穴建物跡から小金銅仏が出土しました。大きさは高さ 10.8 ｃｍ，重さ 200 ｇです。顔や胸の一部に鍍金が残っています。台座部分は見つかっていません。一緒に出土した土器から推測すると，郡家が機能しなくなった 10 世紀末から 11 世紀の時代ではないかと思われます。今後保存処理などを行って詳細な調査を行い，一般公開できるようにしていきます。

小金銅仏出土位置写真（北から）

小金銅仏展開写真

小金銅仏出土状況写真拡大（南から）